

I

生まれた時に住んでいた所はパリの中心地 1 区だ。

家から出て通りを横切り、前のアパートマンの門をくぐって中庭を突っ切ると、レアールというパリ最大の生鮮市場がある。家から右に道なりに進むと、サントノーレ通りに面しているルーブル百貨店に突きあたる。そこを廻り込むとリボリ街に出る。目の前にはルーブル美術館が立ちはだかっている。その中庭を突き抜けていくとセヌ川にでる。この辺りでは一つしかない鉄でできた橋ボンデザールが架かっている。これは人道橋で、手回し楽器を弾いていたりベンチで本を読んだり地面に絵を描いていたり、またその周りに集っている人がいる。その橋を渡ると突き当たりは文化省で、その右手にエコール・ド・ボザールがある。母はそこに通学していた。家から歩いて 10 分ほどなので、産まれる予定日にも学校へ行っていた。またとり上げてくれた産科医ドクター・ルグランは家の中庭から見えるすぐ隣の建物に診療所をだしていた。

ちょうど僕が生まれる時、母は建築学科の 5 年生だ。当時は 6 年制の学校で 2 年を 1 期間と呼び、この学年は最終期間で多くの時間を卒論に費やす。当然必修授業時間は少なく、大方の学生が卒業後を視野に入れて設計事務所等で働いている。母も同様にカルト・ド・トラバユ（労働許可証）を取ってアトリエ・ユルバニズム・アルシテクチュールと言う 6 人の建築家集団のところで働いていた。父も同じところで働いていた。この時はパリの副都心のデファンスで 3 千戸の集合住宅を設計中でとても忙しい。

そのような中で僕は生まれる。1973 年 3 月 1 日晴れ午前 8 時 40 分パリ 14 区のモンソーリー公園クリニックだ。

これは二度目の入院だった。予定日を過ぎても兆しが見えないので、念のため 10 日ほど前にも 3 日間程入院している。帰って 1 週間も経たずに異常を感じて隣のドクター・ルグランに行ったら

「これは破水です」

とすぐに再入院となる。破水しても陣痛が起きないので促進剤を打って、この朝を迎えたのである。父も出産に立ち会う予定だったが電話のかけ違いで間に合わなかった。

「体重 3 キロ身長は 47 センチ、目がブルー」

と看護婦さんが教えてくれ、日本ではすべて黒と思って気に留めないけれど、よく見ればなるほどブルーに見えたそうだ。

学校の友達フランソワ・デュノワイエーやジャンクロード・トゥルネもお祝いに来た。二人共マルセイユのボーザールを4年まで終了して、5年6年の卒業期間をパリのボーザールでと出てきている友人で、既に家族を持ち子育ての経験豊かで、これからもアドバイスを色々してくれそうだ。

近くに住むアトリエの友人で建築家夫婦のジャンポール・フィリップンも見えた。彼らからはタライから産着から1歳くらいまでの衣類を頂いた。短期間しか使わない物は代々引き継がれていくようだから、後で考えるとこれらの品は貸してくれたのかも知れない。

クリニックに5日間程いてから家に帰る。この日はとても暖かかったので、モンスーリー公園の傍を通ると芽吹き始めた木々の枝で霞んだようになっている。芝生は咲き始めたチュウリップにいっせいに植え替えられて、急に春になっていた。

家は1区のブーロワ通り11番地の2階、18世紀の建物で大家さんの言うにはリシュリュウの持家だったとか言っている。当時のパリの住居は、1階が作業場とか門番の住居2階が貴族3階が医者とか教師4階が労働者5階が召使の住居等になっていたもので、2階3階など天井が非常に高い。我家も4メートル75あり、中庭に面した大きい部屋が36平方メートル、もう一部屋は廊下を透して外の光が入ってくるのであまり明るくないがそれでも24平方メートルの広さはあった。両方の部屋には、いつもどれかが切れているシャンデリア、ガスストーブがはめ込まれている大きな大理石張りの暖炉、その上に一對の燭台、縁飾り装飾付きの大鏡が張られている。大家さんの趣味で揃えたアンティークな大きな家具類が設置されていても、充分飛び回れるスペースはある。以前は隣と合わせて一軒で使っていたものを2戸に分けたらしく、シャワーやトイレが取って付けたようで育児向きには出来ていない。1階はコンシェルジュの住居、花屋の倉庫とかカフェになって3階は事務所に使われ4階以上は住まいになっていた。昼間は上の事務所のヒールの音が響くぐらいでとても静かだった。

産後の手伝いは日系商社に勤めている叔母（タンタンと呼んでいた）が来てくれた。友人のゲンゾウさんも家政婦兼ベビーシッター役を引き受けてくれ、オムツを変えたりミルクを飲ませたり、また散歩にまで連れてってくれたりすべて任せていた。1年間産休は取ったけれど時たま学校へ行く時など本当に助かった。日本料理店で働いていたので料理も上手で炊事までしてくれた。

ぼくは5月からは母が学校へ行く時に、いわゆる保育ママさんに預けられることになった。この時保育園を希望したがゼロ歳児保育はシングルマザーとか困窮度ぐあいで決められるということで、この地域では空きがなかった。校内でしている共同保育に当たってみたがゼロ歳児は入れないという。

最初に預けられたところは、家から右に行ってルーブル百貨店の前のサントノーレ通りを左に2街区程シャトレ方面へ行ったところのマダム・ロベールだ。1日預けて迎えに行

ったところ、奥から犬が出てきたので止めた。でもその当時は、家でもフランソワ・デュノワイエーから貰ったロンという気の強い猫を飼っていた。勝手なものでよそのペットの毛がつくのは嫌だったのだ。

もう1度区役所で紹介してもらいガロー家に決めた。家から左へ出てビクトール広場を過ぎて、パレロワイヤルから始まっているビビエヌ通りに、憲兵隊の官舎がある。その大きな建物は、18世紀の貴族の屋敷だったろうと思われる石造で広い中庭のある立派な建物だ。そのほとんどは宿舎になっていて、その2階にマダム・ガローは住んでいる。憲兵隊の夫と小学生のブリュノという男の子とキャロリンという女の子の4人家族のほか、時々2歳の女の子クリスチーナも預かっている。

ぼくの新しい日課が始まった。母が用事があるとき朝から夕方までマダム・ガローと過ごすことになる。そこかしこでマロニエが花をつけ始めた街を乳母車に数分乗せられてガロー家に着く。いつも憲兵が立っていて挨拶して入る。この18世紀の建物は、我家もそうだけれども中2階付きなので2階まで上るのに5メートル以上あるのではと思う。円柱のそそり立っているがらんとしたホールに、幅4メートルくらいのベージュ色の砂岩でできた階段が威厳を放っている。これを上って2軒目だ。中に入ると天井は5メートルちかくあり、3室あるがそれを2寝室と居間として使っている。そのうちの主寝室にベビーベッドが置かれ僕の昼寝用になる。

いつもマダムガローはガウンのまま出迎える。朝の掃除片づけが済むまでそのままにいるらしい。ある時ちょっと遅れていったら留守だった。官舎内にいるときは鍵を掛けないらしく開いていたので、入ってベッドに寝かせつけられていた時戻ってきたのを見たらガウンのままだった。午前中の掃除洗濯が済むまで羽織っているのかも。パリジェンヌは入院していても、クリニックのホールへさえガウンでは行かない。多分洗濯室が地階にでもあって済ませてきたのであろう。

午後の昼寝がすむと乳母車に乗せてもらい二、三分でパレロワイヤルにつく。両側に絵本とかオルゴールとかマリオネットなど置いてる玩具屋さんのある北門を入ると、細長い突き当たりにコメディフランセーズのある広い中庭に出る。左手に砂場があり、暖かい時は夕方までいつもここで、マダム・ガローは同じようなお母さん方とみんなパリジェンヌ然とした装いで、おしゃべりをしたり編物をしたりして見守っていた。

この公園は家からもフランス銀行の横のコロネル・ドゥリアン通りの狭い東門から入ると二、三分で来れるので、2ヶ月前暖かい午後、日光浴のため最初に母に連れてきてもらったところでもある。どこでも観光客がいっぱいなのにここだけはいつも静かだった。

5月最後の週末、事務所のサレムの田舎の家に行った。パリから百キロくらいのカテドラルで有名なシャルトルを通過して、ロワールのトゥール方面に向った。30キロほど行っ

たシャトウダンの近くの牧場の中にあった。牛小屋を5年まえにただ同然で裏のほうにある農家から買ったそうだ。周囲はこの農家のほかにはなだらかな起伏のある放牧地と、耕作地・休耕地の対比のある景色が広がっているだけだ。

サレムの奥さんドゥニーズは3人の子供連れで再婚した。事務所の打ち上げパーティに出てきてジャズダンスなど踊った。とても料理が上手で事務所のそばのお宅へもたびたび皆で押しかけお昼を頂いたことがあった。ある時など行ってみると

「今朝、蚤の市で掘出し物の18世紀の肖像画を買って来たところなの」

と持ち出してきた、その場は真偽の話題になったそうだ。そのパリの家はアンティーク家具でプロバンス風にしつらえてあった。

この牛小屋も週末やバカンス休暇を使って、2階の床を張り壁を塗りキッチンを造りトイレをつけて、やっと人が呼べるようになったと言っていた。その晩は簡単にと言う事でパスタになったのだが

「ネズミに半分バターをかじられちゃったわ」

と大きな残りを入れてしまっていた。

翌日はパリからサレムの友人、トゥールからはドゥニーズのいとこ達が集って、女たちは料理をつくり男どもは家造りを手伝ったりしていた。この敷地周辺にある木から収穫してあった小玉りんごを使った料理が

「もう賞味期限ぎりぎり」

ということでメインになった。ドゥニーズが農家の人と一緒に作ったブーダンにはこれが一番ということでありんごのソテーの付け合せ、デザートにはりんごのタルトということになった。前菜には先週作っておいたというリエットもでて来て、これらは今でも母の一番得意とする料理だ。夕方それぞれ明日はブロー（仕事）と帰っていったが、ぼくたちはロワールに向かった。

シュノンソウのホテルレストランに二泊した。川魚料理が有名で鰻の赤ワイン煮をとったが、魚料理は日本食が一番かなと思ったそうだ。まだぼくが小さかったので車に設置できるゆりかごで連れ歩いていたので、両親は交代でシュノンソウ、ブロー、ロシュ城を見に行った。河岸で休んでいてもこの年は乾燥してたのか風が吹くと砂が舞い上がってゆりかごに覆いをしなければならなかった。

6月半ばから学校は長い夏休みに入った。

事務所のミッシェルから紹介された小児科医ドクター・ベンブラハムは六区のサンジェルマン・デ・プレ近くのシェルシュ・ミディ通りに開業していた。この頃からそろそろ離乳食を始めたら、と

「ミルクにファリンを大きじ一杯から初めて」

「そうか小麦粉を混ぜるのか」

と大失敗をしていた母だったようだ。

ぼくが6ヵ月目に入った7月に暑くはない国ということでベルギー、オランダ、ドイツ、スウェーデンという旅程で出発した。ブリュッセルは一昨年秋、二、三日滞在したことがあるということで、まず風車のキンデルディックをめざした。そこでは運河沿いのベッド&ブレイクファーストで2泊、6ヶ月の僕を抱いて潮来のあぜ道のような所を歩いて、風車、粉引小屋等を見学し、4日ほどでアムステルダムに着いた。美術館が集まっている公園の近くの運河に面したホテルは、建物は新しいのに設備は古く排水管がすぐ詰まる。溜まっていた洗濯物をコインランドリーに持って行ったり、両親は交代でゴッホ美術館やレンブラント美術館を見学した。北欧の学生か、若者の多い町だ。

それから見わたす限り平坦な風景の所を走って、いろいろな町を通過してドイツに入った。各国の歴史ある街並みに溶け込んでいる新しい建築に、とても興味を持っている母だけでも、今回はセーブしてゆっくりした旅にしたいと思っていた。もっと北の方へ上るのは疲れさせるのではないかと思い、デュッセルドルフあたりでもう南下しようと決め、これまでは同じホテルには2泊か3泊しかいなかったが、これからは気候もいいことだしキャンプ場で何日かゆっくりしようとおもった。

以前僕が生まれる前、北アフリカへ旅行した時ツーリストティックなホテルは高いし、安ホテルは鍵もかからずシーツも変えてないし、学生仲間と一緒にオートキャンプをしたそう。ヨーロッパ人のバカンスは1ヵ月もあるので、なかなかホテルで全日程を過ごすと言わねばならない。若者は親類の家に行ったりテントを持ってキャンプしたりと、長いバカンスを楽しむ。

さて僕の生まれて初めてのキャンプ生活は、このデュッセルドルフの近くの白鳥の沢山にある湖畔から始まった。設備はとてもよくてお湯の出るシャワーや水栓、ゴミ一つ落ちていない芝生は緑の絨毯を敷き詰めたよう、僕を素足で転がしておいても安全だった。6月から9月のバカンス時期には、北から南へ大移動してしまうので、去年行ったサントロペやイタリアのホテルやキャンプ場は隣のひそひそ話しが聞こえるほど混雑していた。でもここでは週末を過ごしに来る人は多いが長期バカンスの人は少なく、とっても静かで気に入った。ドイツ人はフランス人と違って世話を焼きたがりと言うか

「タライで湯を浴びせたらどうか」

と管理人さんがタライを持ってきてくれたりした。

でもここにも3日程しかなくて、今度はライン川を南に上ることにした。ライン川流域に発達してきた町ケルン、コブレンツと川沿いの道を走った。ドイツのベッド&ブレイクファーストはどこもきれいでよかったが、特にケルンは古い木造の民家という佇まいだった。黒光りするほど磨かれて、また寝具もふかふかな布団が掛けてあってホテルよりも快適だ。コブレンツはこの辺りのライン下りの基地港で僕も初めて観光船に乗せて貰った。

ローライの岩、流れに沿って色々な城下町があり、両側に続く尾根には城砦があり、船は所々泊まって観光客を乗り降りさせ、コブレンツに戻って来るといったものだった。1日ここで遊んでフランクフルトからライン川の支流の町、ハイデルベルグへ行った。ここは大学都市でいつもは学生の多い町だが、今は夏休みでリュックをしょってパリとかロンドンとか地中海とかへ行ってるのかもしれない。しかしこの町にある大きな城は週末のせいもあったが、近隣や外国の観光客でいっぱいだった。

僕のミルクはいつもエビアンで溶いていた。これは今までどこのドイツのスーパーでも置いてあったのに、ここに来てどうしてだか置いてない。ドイツ製のミネラルウォーターはどうしても微かに炭酸が入っていて、車で町じゅう探しまわった。その頃、僕が少し熱を出してしまった。たいしたことはないと思いながらも37度となると、大事をとってパリに近づきたいと帰路につく。

カールスルーエを經由してかすかにまだ西の空に赤みが残っている8時頃、平原にストラズブルグの街が見えた。翌朝は10時ごろからナンシーに向けて走り出した。その時父は結婚指輪がないのに気が付きそこで国道沿いの店からホテルに電話した。その時はないという返事だったが、数日してから床に転がっていたのを掃除の人が見つけたということで小包が送られてきた。ストラズブルグについた時夜になってしまっていたので、いつものように安くて良いホテルなどと言って探している暇はなかったので星付きの格式あるホテルにした。キャンプしても食事はレストランで美味しいものを食べたい方だったので、泊まる所はこだわらないのだけれども、この時は遅くなってしまっていた。

ドイツの代表的料理の一つシュウクルートを、デュッセルドルフでもストラズブルグでも食べたけれども、フランスに入ってくるとそこでフランス的な味付けをされるのかとてもおいしい。スペイン旅行をしたときもパエラがフランス側で食べた方がおいしかったと母は感じたそう。

パリに戻ってくるとかかりつけのドクター・ベンブラハムはバカンスを取ってしまい、薬局で教えてもらった近くの内科医に見てもらったところ『三日ばしか』だった。1週間ほどパリにいて、医者に

「バカンスの続きをしてきてもいいですよ」

と言われ、今度はボルドーの海岸へ行くことにした。

前回は画家の友人の家に預けていた猫のロンを今度は連れて行くことにした。とっても気が強くてその家のカーテンを攀じ登るので無残な姿だった。道中の車の中でも、いつも外へ出たがって危うく120キロで走っている車の窓の隙間から飛び出しそうになり、必死で母が尻尾をつかんで助かった。ボルドーでは郊外の海沿いの松林の中のキャンプ場を選んだ。ロンは相変わらずチョウを追いかけてたり松に登ったり冒険に余念はなかった。僕は初めて大西洋の荒波に足をつけてもらって波の音に怖がっていた。

もう10月も終わり頃になって、母はグループ設計での今年度のテーマ決めが大詰めとなっていた。グループのソフィの親戚が持っている、コンピエーヌから入ったサンジャン・オーボアの家を借り、4日間集中研修することになった。

ソフィは両親が離婚していて、学校の近くの6区にある祖母の持ち家に住んでいる。ある時みんなで食材を持って押しかけたところ結構広い。

「一人で住んでいるのはもったいないね」

と言うと「掃除が大変だから父のところから週に一度手伝いに来るのよ」

この森の中の家も、いつも住んでないけれど別棟に管理人さんが住んでいるので、6部屋もあっても整備がゆきとどいている。いつものジャンクロードやフランソワも家族で参加して小さな子供もいるし賑やかだ。19世紀のインテリアでまとめてある部屋を汚さないように子供はもっぱら外で遊ばせようとした。

ぼくは11月1日トゥサン（万聖節）の祝日に父に車のゆりかごの中に入れて向かった。一人で後部に長時間居ることが無かったのですぐ立ち上がってしまい

「これからは椅子にしないと危ないね」ということになった。そんな事でオートルートの出口で後部座席に気を取られていて前車に擦ってしまった。ヘッドライトが片方上向きのままやっと合流した。トゥサンは彼岸と同様、みんな菊の花を持ってお墓参りをする。この時期車で走っていると集落のなかの教会の墓地ばかりでなく、突如畑の中にお墓があるのに気がついたりする。

年が明けてぼくが満一才になろうとしている頃母は仕事に復帰した。サンパティックな事務所は新年になると給料を個別面談して決めることが行われる。ちょうど母も復帰したばかりだけれども、値上げ要求をしてアップになった。ここでは社会保険がしっかりしているの、産休中は止めさせられないとか、また子供の定期検診ごとに養育費が幾ばくかおりたので日本から見ると母親に働き易くできていた。

## II

3月1日は満1才の誕生パーティを開いた。ガローさん一家や友達を招いた。マダムガローはぼくが乗って遊べる大きなぬいぐるみのロバを贈ってくれた。ぼくの友達には4月生まれのあやちゃんと日本人だけれどフランス名のレアちゃんがいた。レアちゃんとはおもちゃの取り合いでよくけんかをした。この満1才頃ちょうど歩き始めた。最初の言葉はヴォワチューだったそうだ。

誕生会の後1か月もしないうちにもう一つ重要なパーティを家で開いた。ぼくが生まれてすぐのときに、家事育児すべてのことを手伝ってくれたゲンゾウさんが帰国することに

なった。2年あまりのパリ生活で腕を上げたレタリングの見せ所と、案内状は歌舞伎の看板に使われる勘亭流もどきの毛筆でしたためられた。オペラ通り界隈で、日本人相手に「免税店」「日本語を話します」という看板書きをしていた。それも話を聞いてみると、下手な文字で書かれている店に飛び込んで書かせてもらう。このアルバイトでかなり生活が潤ったという。また日本料理店のアルバイトで培った腕を振るうために、メインディッシュを特製ちらし寿司とした。また出し物として母の衣装をつけて完全女装で詩の朗読をして見せた。何故女装披露かは今もってわからない。

ここに集まった20数人は少年少女漫画クラブパリ支部と称してまわし読みグループの会員が大半を占めている。ポンピドーセンターの設計に携わっている夫妻、プライベート・フィルム作家、モンマルトルの画家、パリ大学で社会学を学んでいる早稲田の留学生、イラストレーター等多才なグループだ。この日はこのような顔ぶれだったがパリの中にはいろいろな日本人グループができていた。我家は広いし、上下の階に気を使わなくて良い環境だったので、いろいろな人々が集まった。

同じ設計事務所の構造部コスタンジェバックのアトリエに勤めていた大手ゼネコンの子息夫妻も、帰国のときはアパルトマンを引き払って、家に短期間滞在していた。その時もパリに事務所を構えていてシャルロット・ペリアンや卒業設計の審査員をしてくれたジャン・ブルーベの事務所兼住宅に連れてってくれた女史、コンセルバトワールにチェロを学びに来ている大地主の一人娘と建築家のカップル、クラシックカーみたいなモルガンを乗り回している建築家と服飾デザイナーのカップルの人たちとの色々な集いがあった。この子息夫妻は親の反対を押し切ってパリに来たので、帰国前にパリのレストランでこのような人たちを招待して盛大な結婚披露宴を開いた。その時の二次会はバー・エトワールで夜が更けるのも忘れて名残惜しんで祝った。

またタンタンのような女性が良く集うのはカトリック系日本人会がある。ボランティアでお年寄りの世話に行ったり、タンタンなどは日本から小型テレビを持ってきてあげたりしていた。この会はよく小旅行等みんなで行って楽しんでいた。ぼくも日帰り旅行にピエルフォンなどへ連れてってもらった。この会には入っていなかったかと思うけれど、タンタンととても親しく付き合っていた外務省付きのドクター夫妻がいた。アフリカ勤務が長く動物の習性、大自然の中での生活環境等珍しい話ばかりで厭きさせない。16区の一階にある住まいに招かれたときなどアフリカからのお土産として象牙の装飾品等を頂いたりしたものだった。

四月の復活祭前後十日間休みを取ってイギリスへ行った。近くに住んでいるタンタンも一緒だ。カレーからドーバーを渡ってイギリスに入ると大陸とは違って起伏の多い日本の地形に似たような風景を通り過ぎてロンドンのタンタンの友人の叔母の家に着いた。友人

と言うのはオットマーといってスイス人のクリスチャンである。タンタンに言わせれば

「何せスイス人というのはヨーロッパ人の間で有名なほど、非社会的で頑固者で通ってます！そのスイスでもチューリッヒの友人から聞いたのですがオットマーの生まれ育った地方は最も頑固者が多く、その中でもオットマー家が町一番の横綱ではないかと言ってます」なるほどと思った。四角い大きな公園を囲んで建ち並んでいるその家はファサードもインテリアもヴィクトリア時代の様式の建物だ。タンタンだけそこに泊まりぼくたちは近くのホテルを取った。動物園に行ってみたらなんと広くて放し飼いになっている様などころだ。大きな鳥かごのような小屋に居る鷺がばたばたと舞い降りてきたりでとても囲われているとは思えない。

タンタンを友人の家に残して僕達はステラホード・オン・アポンに向かった。ここは町全体がイングリッシュ・ガーデンの様に刈り込まれた生垣や咲き始めた花々で絵本を見ているようだ。ここのB&Bは周囲に合わせた庭園が素晴らしかった。とかくイギリス料理はといわれるが、朝食はとびきり美味い。まずグレープフルーツの半割が出て次にコーンフレーク、ベーコンと卵とトマトを焼いた一品、それに各種のジャムと焼きたてのパンや飲み物。どこのベッド&ブレイクファーストでもこれくらいの品数はあって、フルーツの所がジュースに代わったり、コーンフレークでなくオートミールになったりするぐらいだ。2年前ロンドンの民宿での朝食はパリと同じだったので、地方のほうは伝統を守っているのだろうか。この朝食はパリに帰っても、帰国しても時々用意された。ここからリバプール、グラスゴー、エジンバラ、ニューカッスル、リードとまわってロンドンでタンタンと合流して帰った。

この年の8月には日本に1か月間バカンスを過ごしに行った。僕はこの様に湿度の高いところは初めてだったので体中にあせもができてしまった。2週間ほど父の実家に滞在したが、そこでは祖母が庭の桃の葉を入れたたらいで行水を良くつかわしてくれた。近くに住んでいるいとこの雪子ちゃん麻衣ちゃんが良く遊んでくれた。幼稚園の先生に良く僕のことを話していて、先生はぼくのことをフランス人だと思っていたそうだ。それから母の実家へ、2週間涼しい所で過ごしてすっかりあせもは直ってしまった。ここから両親は東北旅行に出かけ留守番だった。ここではマルチーズのボビーと柴犬の太郎とオームのペロがもっぱら僕の遊び相手だ。ペロは教え込まれていていつも「リュウちゃんおはよ、リュウちゃんおはよ」と繰り返した。

パリに帰るとぐっと涼しく秋めいていた。この11月には、広くなくてもいいから設備のいい所へ越そうと考えていた。2ヶ月ぐらい新聞で探したり友人の紹介でアパルトマンを見に行ったりしてやっと17区になった。プッシュェ通り10番地でブロシャンと言うメトロの駅から3分ほどだった。隣のアパルトマンの1階はスーパーマーケットになってい

て買い物は便利な所だった。パリの賃貸アパートマンは家具付きがほとんどでお皿からカーテンまで一通り揃っている。ここも同じで運ばなければならない家具というのは僕のベッドくらいだった。今度は明るい所と思い5階を借りた。建物は6階建てで階段ホールに2戸ずつ面している。家は入るとホールでドアが6枚見える。左のドアは通り側の主寝室と居間食堂突き当たりのドアはバスルームと中庭側の僕の部屋右のドアはキッチンとトイレ、また使えそうにないような地下室もある。

同じフロアの隣は大家さんで南仏の方の家に行くとかでほとんど留守だ。ここのコンシェルジュ一家はコルシカ島出身で奥さんはアラブ系だ。女の子が二人いて上の子はラリー下はアンドレアといった。この建物にはこの他には子供はいないと長く思っていたけれどもある時、下の階にも一人いると分かった。外で遊ばないのでまったく分からない。

この頃から母は設計事務所を辞め、あと卒業論文と製作だけになっていた学校だけにした。それも教授と約束した時間だけ出かけるようになっていたので、その時はコンシェルジュに預けられた。そこのアンドレアはぼくより1才上だったのでよく公園で一緒に遊んだ。ある時中庭で遊んでいる時石畳の上で転んで舌を前歯で少し切ってしまった。引越と同時に小児科のホームドクターを5分位のルジャンドゥル通りのドクター・ジャン・ポール・ブルジョーに変えてた。母が帰宅して、転んだことをコンシェルジュのおばさんから聞いてそのドクターの緊急連絡先に電話をすると

「口の中の傷は1センチまでならそのまま治ります」

とドクターの答えだった。夜中になってまだ出血が止まらず、もう一度ドクターに電話で相談したところ、「近くの病院に電話をしておきますから行ってください」結局何の治療もしなくてよかったけれども、いつでも対応してくれるドクターにとっても心強かった。

### III

3月、2才の誕生日にはマダム・ガロー一家や友達を招いた。隣の9区のプラス・クリッシーにすんでいる建築家のカリオン一家も僕と同年のジーンヌと共にみえた。メトロで2駅しか離れていないのでよく遊んだ。ジーンヌのマモンは日本人でシャトレ劇場の舞台装飾を仕事にしていた。仕事上の技術を駆使して改装したアパートマンはかわっていた。天井までフラスコ画のような絵が描かれて床はジュウト敷きで土足厳禁にしており、地中海風なインテリアが心地よい。

3月の初めにはピエルフオンヤルアンに旅行した。この時期は日によってとっても暖かい日もありで城の芝生で転げまわったりカテドラルの広場で走りまわったりと目が放せなかったそうだ。

4月の7日から13日の一週間は復活祭の休暇をとってスキーに行った。日本人ばかり

10人ほどで、集合住宅形式の貸し別荘を2戸借りた。この時は鉄道でリオン駅から行ったのだが、予約していた列車に乗り遅れてしまった。ところが親切な駅員さんが、次の団体寝台車に乗せてくれた。

その列車はサービスマリテール（徴兵）の若者を乗せているだけだった。乗った車両ほとんどカラで時々隣の車両から歌声などが聞こえてくる。車内を通過していく兵隊さんが「ウワー、シノワ（中国人）？ベトナムアン？」「ノン、ジャポネ」ベトナム戦争で多くのベトナム人が戦火を逃れてパリに住んでいた。フランスも10年まえにはアルジェリア戦争をしていた。事務所の30代のベルナル・ポジーはアルジェに行ってきたといってるが戦争の話はしない。学校の友達フランソワ・デュノワイエやジャンクロード・トゥールネー、フランソワ・ドゥソオも学校を卒業してサービスマリテール中だ。三人とも建築だったのでチュニジアやモロッコに行き集合住宅や砂漠の中の小学校建設などに携わっているということだ。フランソワ・デュノワイエは奥さんがたまたま職がなくなっていた時なので一緒にアフリカへ行ったという。フランソワ・ドゥソオの奥さんは建築家で一緒に仕事をしてきた。アネット・トゥールネーはグラフィックデザイナーだが二人目の息子ができたので実家のあるエクサンプロバンスへ息子と共に移っていった。

スキー場はエム・ラ・プラーニュというスイス国境に近い場所だ。全館暖房を電気式でしているのか室内はとても乾燥して暑く、みんなで作る食事も冷たいデザートに人気があったりした。ぼくは一山超えたところにある保育所に預けられたり、誰か交代で一緒に遊んでくれたりした。保育園ではいろんな国の子供が来ていてイタリア語、ドイツ語、英語が飛び交っていたが、アジア系は僕一人だった。

ここではリフトを乗り継いでいくとスイス側へも降りられるのでパスポート持参ですべる人もいた。せっかく僕もスキーに来たのだからといっしょに1キロも登ってしまうロープウェイに乗せてあげようと全員で頂上へ行った。スイスの山なみフランスの尾根が深いブルーの空に映えてくっきり連なっている。帰りは急遽北海道出身の湯川さんが僕を抱いて降りてくれることになった。湯川さんは素晴らしく上手でストックなしでも滑れる。その日はとても暖かかったので、誰かのアノラックを使って念のため、ぼくを谷底へ落とすにはいけないので、首から袋状にして提げて入れ1キロも滑り降りてくれた。なるべく緩やかな尾根続きみたいなコースを選んでしたが、母が視界からフワリと消えてしまったのでどうしたのかと思ったら一段落ちてしまっていた。この中で一番経験不足な母だったがでも何とか無事に下までたどり着いた。

1週間が過ぎてバスで降りるのだが、下るごとに木々の芽が膨らんで霞んで見える。鉄道の駅まできたらもうタンポポも咲いて葉も青々としてきて鳥の囀りまで聞こえてきた。遊んでいるうちに浦島太郎になったようだ。

6月になるとパレソーに住んでいる浜崎さんからさくらんぼが収穫時だからと誘いを受

けた。国鉄のソー線に乗ってパリに出て来るのでリュクサンブルグ公園で時たま遊んだ人だ。パリから25キロ位シャルトル方面に行った郊外の町でモーリス・ベルトー通り十七番地にあった。広い家庭菜園の中に立っている一戸建てで1階を大家さんが住み2階を代々日本人に貸している。ちょうど母が仕事で忙しかったのでぼくだけ1泊させてもらった。真っ赤に熟れていて美味しいのだけれど虫がよくついていた。

「殺虫剤使わないからよ」フランス人はぜんぜん気にしない。ぼくより1歳上のリョウちゃんも1日中遊んでさくらんぼをいっぱいもらって帰った。あとでこの時期しか作れないタルトを焼いてもらった。

今年もバカンス時期になった。日本に帰国しているS先生から「家内が息子四人連れてパリに休暇で行くからアパートマンを貸してくれないか」と言う話がきていた。S夫人はフランス人で「8月15日位まで知人の家具店がバカンス中なので店のベッドを使わせてもらうからそれ以後を頼む」という。休みを8月16日の土曜日から9月14日の日曜日までとする事にした。今回は友人のいるドイツを通過してギリシャに行くことにした。ぼくは2歳半になろうとしている。1ヵ月空けるとなると準備はこの12日の月曜日から徐々にはじめていた。月を跨ぐので家賃の支払いとかキャンプもするだろうからその準備等、16日は買い物家の片付けで終わってしまった。

17日はS夫人に鍵を渡し、やっと東へ向けて出発した。まずナンシー、ファルスブルグからストラスブルグへ、近づくともまず丘陵から大聖堂の尖塔が見えてきた。なんとなく懐かしい。前は「三日ばしか」で泊まるだけだった。ここは戦争のたびにドイツになったりフランスになったりした町なので言葉の訛りも町の雰囲気もなんと言ったらいいかドイツらしい。川に囲まれた歴史的保存地区となっている中心広場は、木の梁・柱・筋交いを見せた街並みになっており、この日も周辺からの観光客でお祭りのような賑わいだった。フランスを後にして温泉で有名なドイツの保養地バーデンバーデンにいった。ここは山の中のとても静かな町で、全体が公園になっているような、あるいは公園の中に町が作られたかと思うほど、緑が深い。中心にはカジノがあり、広場にはぼくくらい大きなチェスのこまが置かれたりしていた。

ここからストウツガルトをへて、母の同級生の中島さんが留学しているミュンヘンへ行った。行くことは知らせてあっても、気ままな旅を続けているので日を知らせてない。中心地から車で20分くらいのホッシュヘルン通り13番地に住んでいた。戸建住宅が並んでいるような、フランスと違って市街地が広がっていったような地域だった。一緒に町の人で込み合うレストランへ行ったり、再開発の街を見たり、オリンピックの施設を見学したりと、ぼくも迷子にならないようにとしっかり手をつながれて歩いた。

20日には友人も次の宿泊地オーストリアのザルツブルグまで付き合ってくれた。早く着いたのでそのキャンプ場で一緒にバーベキューをした。ここは美しい町でドナウ川の支

流ザルザッシュ川の流域に発達している。川を挟んで片側は高くなって19世紀の城があり、上ってみると対岸の町が鳥瞰図的に見える。ここは音楽都市とよく言われているが、その夜もどこからこんなと思えるような正装した人々がホールに詰め掛けていくのに合った。その晩は鴨料理の美味しいレストランだったが、ぼくにとっては窮屈過ぎるところだった。

一日中街を歩き回って22日の朝はウイーンに向かった。ここではドナウの川風の強い日に当たってしまい灌木の中のキャンプ場は砂埃が舞い上がって、見学したいところはたくさんあるが先へ進もうと美術館を1ヶ所見ただけで出発した。

23日にはユーゴスラビアに入ってまずは首都ザグレブに着いた。中世に建造されたのだろうか壮大な建築、美しい広場、そこのカフェテラスではゆっくりと時間が進んでいるような和やかな人々の様子だった。何軒かホテルをあたったがフェスティバルでいっぱいだった。その上、土曜のためすでに案内所は閉まっていた。そこで町外れのドナウ川の支流サバ川のそばのキャンプ場にテントを張った。翌朝町の中心に古くからある市場に行ってみた。その広場から出ている道路の両側にまで露店が出てきれいな織物の手提げ袋とかスカーフ、駄菓子とかワタ飴とかアイスクリームとか何でもあった。この辺りは夜中まで賑わっていたが翌日は夢であったかのように静まってしまっていた。

24日今度はプリティビカ湖に向かった。夏の間バカンスの外国人がたくさん来るけれども、ホテルが少ないので民宿をする人が多くたくさん街道に並んでいた。この国は六つの民族が入り乱れ地方により言語が違った。観光客はドイツ人が一番多らしく、街道筋や民宿の前にはいつもドイツ語で「空室あり」と立て札を出していた。着いた時は夕立雨がどしゃ降りですら選ぶ余裕もなく一軒に決めてしまった。いつもはホテルでも部屋を見てから決めるのだが、落ち着いてよく見渡すと農家を改造したような家だった。しばらくして雨が上がり、辺りを見渡すと鶏が放し飼いされていたり山羊や馬が放牧されていたりしていた。折から虹がパーと架かってきてプリティビカ湖からかと想像した。

翌日は朝から真夏の太陽がじりじり照りつけた。湖はこの周辺一の観光名所にもかかわらず、駐車場も整備されておらず、草原や道の両側には停められるところは全ていろんな国のナンバーの車が駐車していた。入ってみるとたくさんの滝、あるものは虹が架かっていたり洞穴の中であったりとか、寒いくらいだった。

25日にはプリティビカを発ち海に向かった。山道ばかりを走っていると、緑がだんだん少なくなって白っぽい岩山や石ころが多くなり、見渡す限り家一軒もなくなり尾根に着くと急に視界が開け、遠くにアドリア海が一望にみえた。その日は雲が多い日で海に浮かぶ細長い島と雲が交じり合って、水平線を消してしまっていた。

山を下って行くと街道に「モスクワ・大サーカス来たる」の看板が目に入ってきた。地図を見るとここが目指していたザダールだった。海岸の松林の中のキャンプ場に落ち着き、早速その晩生まれて初めてのサーカス見物に行った。夏休みで近隣から親族連れや、ドイ

ツ人等の観光客で、広いテント小屋も超満員だった。3頭の像が色々芸をして見せたのを見て夢中になって、ぼくは思わず立ち上がって一人で手をたたいていた。周りの人がそれを見て、ぼくに向って手をたたいていた。

このキャンプ場の一角には町のホールがあり、バンドが入ってディスコが開かれ、若者や観光客が楽しんでた。内陸と違って雨が少なく晴れの日が続き長居したかったけれど、2泊ほどでザダールを発った。

次にトロギルではすぐ目の前に島が迫っている砂浜のキャンプ場だった。少しゆっくりしたいと思ったが町に近かったからか若者が夜中まで騒いでいて居心地悪かったので、一泊だけで次に進んだ。ザダールもトロギルもローマ時代からの町で、中世に造られた大聖堂などはしっかり修復されて残っている。走っていると地図に出ていないような小さな集落が、人影は見えず静まり返ってローマ時代の遺跡のような佇まいをかもし出している。そんな中でもしっかり古代都市の遺跡を残している大きな町スプリットでは、ローマ皇帝の宮殿の前を通っただけで先を急いだ。

ズブロブニックのちょっと手前できれいな入り江があり、地図には出ていなかったけれどプラプラトラというところだった。オリーブの灌木の中にテントを張り、周りを観察するとドイツ人が家族連れで楽しんでた。家族連れが多いところは落ちつける。シュノーケリングで海中を除くとカラフルな藻や魚が透明な水の中を泳ぎまわっていた。この時はぼくものびのびと砂浜を走り回ったりゴムボートで島を廻ったりした。29日から9月3日まで5日間ここを拠点に周辺の町を廻ったりして遊んだ。

ここから数キロのところにはドブロヴニクという紀元前2、3世紀にできた町があり15世紀にはベニスと並んで貿易都市として栄えていた。この町は山が迫ってきて平地が少なくすぐ海に臨んでいる。2千年もの間何回となく外敵に攻められたものの町を守り抜いてこれたというのは、この地形もさる事ながら断崖の上に更に城壁を廻らせてある事によるものか。当時そのままの街区がそっくり残って、大理石張りの中心道路はピカピカに磨かれ、生活しながら保存している。此処にはいい貿易港がありその一画から出ている島巡り観光船に乗る。その日は風があつて波が高かったが、海から見る町は堅固さを改めて認識させられる。船はバカンス客たちを乗せアドリア海クルージングを少々行い、ヌーディストが住み着いているロクルム島を巡り「国外からのヒッピーです」とアナウンスがあつたりした。

ここからギリシャまでは200キロ弱だったが予定の日数をはるかに過ぎてしまったので、ぼくの初めての長期にわたる車の旅は、ゆっくりと帰路につくことにした

9月3日サラエボに着いた時は、また夕立だった。今回この国では内陸に入ると雨に降られることが多い。観光案内所で聞いた民宿をなかなか探せないでいると、そこは集合住宅の中の一軒だった。5部屋あるうちの3部屋を民宿としていた。翌日はからりと晴れたいい日になり、街を歩くと大きなモスク近くにカトリック大聖堂あり、と宗教は共存している。

周辺からたくさんの農産物が集まってきている市場、手工芸品等商っている露店など見て廻った。

ジカイツ湖からノビとユーゴスラビアを4日かかって北上してイタリアに入った。9月7日になっていた。見渡す限り車ばかりの大駐車場に停めてから、ベニスのまちへ行く船に乗り込んだ。船着場に着いたとき急に夕立にみまわれた。この旅は夕立ちが多い。すでにサンマルコ広場は水浸しで、木製のデッキが作られていた。雨の中をぼくを抱いて回って、広場のすぐ裏手にあるホテルに決めたときには、すでに6時を過ぎてしまっていた。お風呂に入れてもらって先に夕食を食べたらその日は疲れたと見えてもう眠り始めてしまった。いつもは食事に行くときはぼくをバギーに乗せて連れていったのだが、置いていかれた。すぐ前のレストランにいたので母は途中何度も見にきた。

ほとんど水路を使って物を運ぶので道はとても狭く建て込んでいる。そのかわり所々に広場があって、市場が開かれていたり、子供が遊んでいたり、カフェテラスでは老人と観光客がゆったりと並んで座っている。

ボローニャ、ミラノはぼくの生まれる前の年に来ていたそうで一泊づつしてフランスへ急いだ。自宅のそばに住んでいる友人カリオン一家が

「母親の別荘がニースにあるので、そこに居るから泊まって」ということだった。9月10日、町に着くとすぐにアレーヌ・ドゥ・シミエ通り126番地へ行って見たが留守だった。ちょっと空いているだけなのだろうと、二度目に行った時、隣家の人が

「一昨日帰りました」という。案内所で紹介してもらいプロムナード・デザングレの外れの海に見える格式だけは高かったホテルへ泊まった。翌朝は結構石ころの多い砂浜で遊んでから帰路に着いた。コートダジュールの海岸に沿った道路は、バカンス客も一段落としたようで比較的によく走った。カンヌを過ぎサンラファエルを越えるとフレジュス湾の白い砂浜と透き通るような静かな海が見えた。休暇もまだ残っているので、その湾に臨んでいるサンテイギュの民宿のように小さな居心地よさそうなホテルに泊まることにした。

9月13日、朝早くから出発、今日は800キロ走らなければならない。給油時が休憩時間という具合で、パリに近づくと少し低く盆地になっているので、どこの高速道路からも街の様子が良くわかる。まず、夜中だったけれどもエッフェル塔やモンパルナスの超高層ビルが見えてきて、一ヵ月も旅をしてくとふるさとへ戻ってきたと思う。

ぼくは9月の中頃からエコール・マテルネル（幼稚園）に行き始めた。ここは誰でも2歳以上なら入れる。但しオムツが取れて「ピピ」「カカ」が言えること。小学校の前に何年か入らなければならないとされている。

家から時計屋さんの角を曲がってクリッシー通りに入ったらすぐにパン屋さんの角を曲がると、シテ・デ・フラワー（花の街）という遮断機の付いた道があり、ここにエコール・マテルネルがある。この通りに面してすべての建物が四季折々に咲く庭をもち4階建てく

らいに揃っている。裏側にサービスコートがあり洗濯物などが庭に乾してあったりする事はない街だ。

最初の日には庭で転んで母が迎えに来たとき泣いていた。何ヶ月かは午前中だけで帰り、午後は昼寝をしてからバチニョール公園へ散歩に連れてってもらおう。母と行くこともあるしコンシェルジュに連れてってもらおうこともある。そこは真ん中に大きな池があって木がうっそうと茂っている。また周辺には遊び場が4カ所作ってあり、ひとつには大きな滑り台があった。最初怖くてしたの砂場でおもちゃで遊んでいたが、いつの頃からか上から滑り降りられるようになっていた。木馬や飛行機が着いているマネージュ（メリーゴーランド）があり、行くと1回は乗せてもらった。池には築山が作ってあって小さい滝やこいがいたり、鴨やアヒルが1年中子供に追い回されていた。冬にも芝生は青々としていた。春近くなると花の苗を植えている色々な花を見せてくれた。

この公園の周りには空きスペースがとってあり常設市場になっていた。朝はどれくらい早くから開くのか知らないが正午まで開いていて、水曜日など幼稚園が休みの日には午前中に来て遊んだ帰りに市場で野菜、果物、肉といった生鮮食品を買っていた。この市は午後四時からまた開く。その時は幼稚園や小学校に迎えに行った子供連れの人で賑わう。

75年の12月には20日土曜から休みを取って、母の学校の友人トゥールナイエーの実家がある町ラマストルに旅行した。アルデッシュ地方フランスの中央高地だ。そこで時計屋を営んでいる。到着した夜はホテルがとってあり夕食は遅くなったので途中で済ませたので挨拶はしなかった。翌日訪ねて見ると店舗の裏には中庭があり住宅が続いていた。

「今晚からこの2階に泊まって」

という事で食事もすべてお世話になってしまった。山岳地帯を案内してもらおうと地球が裂けてしまった様な深い谷があったり、寒村のような切り立った岩肌に張り付いている横穴式住居もあった。

「24日には親族がグルノーブルに集ってクリスマスをするので」という事でローヌ川まで一緒に走ってそこで二手に別れて帰ってきた。

#### IV

3才の誕生日にはエコールのクラスの友達を数人招待した。その中のベルジニーの家には母とよく遊びに行った。3人兄弟の長女で生まれたばかりの弟と2歳上の兄がいる。そのためマモンは産休を取っている。出産ごとに1年の産休を取り、その間に講習を受け、秘書という職業の中でもキャリアアップを図っているという。そのために時々オペール(子守)を頼んでいる。産休が終わる頃郊外の広い家に引っ越していった。

1976年3月父の友人高野さんが日本から新婚旅行で恵子さんとパリへ来た。10日間休暇をとって一緒に旅行に出る。リオンから50キロほど東へ行ったところに郵便屋さんが40年かけて建てたという城を見学した。「パレ・イデアール」という名で東洋やアフリカやいろんなイメージを盛り込んであった。スペインのガウディと同じ時代に生き、モチーフが似ている。死ぬ前に自分の墓も、と近くの墓地に8年もかけて小石を埋め込んで建ててあった。行ってみるとカトリックのトゥッサン（死者の日）といって墓参りをする日のようにいろいろな花で飾られていた。でも良く見たらこれらは造花だった。

そこからグルノーブルを通過してアボリアッツのスキー場に着いた。いいリゾート施設が並んでいて温水プールが雪の中にできていたり、これらの施設を結ぶ交通手段として馬車を利用したりと楽しい。友人夫婦はここから車でレマン湖まで3日ほど旅行してきた。ぼくたちが1週間いる間晴れて暖かい日が続いたので帰る頃には雪が解けて赤土が所々出てきてしまっていた。パリへ戻ってくるともうすっかり春でこの季節は変わりが早い。新婚旅行に来て子連れと一緒に旅をするのはちょっと無理があったようだった。恵子さんは「ツアーできたらもっと沢山まわられたのに」と漏らしていた。

5月になるとエコール・マテルネルへ行く途中の庭に様々な花が咲き始め、気候のよいこの時期、始めて遠足があった。バンセーヌ動物園に親子連れで行った。パンダが屋外の芝生の小高い丘のようにになっている所で笹を食べたりと広く囲った中で遊んでいた。休憩所でお弁当を食べてから母が皆に千代紙を渡して、折鶴や奴さんの折り方を教えていた。翌々日には母の日の会がありシルクハットを作ってそれを被りお遊戯をした。

気候のいい5月の最後の週末をはさんだ5日間をロワールの城廻りに当てる。ロワールの河川敷にできているキャンプ場を拠点として動いた。シャンボール、ボージャンシー、シュベルニー、ビランドリー、シノン、眠り姫の舞台となったユッセ城など見てまわった。ビランドリーでは広大な庭園の中に迷路ができていて迷子になってしまった。シノンは他の城から見ると廃墟になってしまっていたが夕方からライトアップして「ジャンヌダルクとこの城について」の語りの会を開いていた。

夏のバカンスはブルターニュ地方に8月16日から出かけた。パリからルマン、アンジュを通過してナントに1泊し、翌日キャンペールに行くとお祭りらしかった。民族衣装に身を包みホルンを吹きながら街を練り歩いている一団にあった。街を歩いている女性はブルトン特有のヘアスタイルにしている。運河なのか入り江なのか川なのか水に映る木組みとしっくり造りの家並みはとても落ち着き払っている。海岸沿いを戻りポンアボンに落ち着いた。ポンアボンは設備の素晴らしくいいキャンプ場だ。25メートルプールがあり、テントを張るのでもキャンピングカーを設置するのでも1ヶ所ごとに林を切り開いて整地

してある。隣との境は樹木で隔てられている。ここを拠点として近隣を見て回る事にした。このブルターニュ地方はりんごから作るシードゥルという発泡性ジュースの産地だ。ほとんどの農家は自家製のものを作っている。買いに行ったついでに作るところを見せてもらった。甘くてべたついているのでハエが寄ってきて

「ハエが瓶の中に落ちてる」「ああこれ」

とぼいとするだけだった。父はサンチビのロマネスク様式の教会を何度か通って描いたり、母とぼくを描いたりして過ごしていた。近くにゴーギャンゆかりの芸術村という白壁の小さな家が並んでいる一画があった。20分ほど走ってドルメンの巨石をみにいった。また車で30分行くと西の端ブレストの町につく。ドーバー海峡に向いて大砲が数基置かれている。また墓地の多い町だ。ここにはパリにあるサーカス学校からのサーカスが来ていて、馬の上で犬が演技するのを懐かしく見ていた。

9月に入ると通常の生活が戻ってきた。朝9時までにはエコールへ母に送ってもらい、お絵かきをして遊び10時にはおやつ時間だ。ショソンプンムやパンオーショコラという菓子パンと牛乳がでる。それがすむと天気の良い日は庭に出てマットを敷いてその上でおもちゃで遊ぶ。11時半に母に迎えに来てもらって家でお昼を食べる。また1時までにはエコールへ戻って4時半まで過ごす。3時におやつがあり、その前後は工作をしたり、歌の時間があったり、空模様によっては、庭で遊んだりして迎えの来るのを待つ。カリキュラムはしっかり小学校入学前の教育が組まれているようで、名前を書いたり数を数えたりもしている。子供の発達状態によっては、飛び級で早く小学校へ入学を促したりその反対の場合もある。ぼくは先にフランス語から話しはじめたということで両親が母国語でない言語で始めてしまい言葉に遅れがあった。ある日幼児教育専門家から

「まだ時間はありますがエコール・プリミエル（小学校）への入学を一年遅らせるのも考えに入れて置いてください」

と言われ、母は帰国もすでに視野に入れてあるので言語教育に頭を悩ましていた。

家庭の事情によってはキャンティン（給食）を頼めるし、迎えを6時半まで延長できるけれども、母は家とエコールの間を二、三回往復する方を選らんでいた。このような送迎は小学校へ入っても同じだ。パリの街なかではめったに子供だけの姿は見かけない。遊びに行くのも、公園だったら誰か付き添っているし、友達の家に行くのなら送っていく。学校も外から見ている分にはその街区のファサードに溶け込んだ建物なので、送迎の時間帯にあわない限り目立たない。でもそのように1日3回も送迎できるというのは、よほど近くに小規模のものがあるということだ。

この年の12月には母の妹、由佳ちゃんが来た。ぼくと同年の女の子が居るが日本に残して1ヶ月くらいの予定で、滞在した。その頃ぼくを置いて「魔弾の射手」を上演してい

たオペラ座やブラッサンが歌っていたシャンソニエにいく事が多くなった。9月頃からそういう時の為に頼むオペールを日本人にしていた。沙代子さんという語学学校にきている24歳の人だ。佐代さんが来るときは、ぼくは大体食事をすませお風呂も入れてもらって後は寝るだけ、と言うところでバトンタッチされた。それから絵本を読んでもらいながら寝てしまう。そろそろ帰国ということを考え始めて母国語をしっかりと教えなければと思っていたそうだ。

このクリスマス休暇は由佳ちゃんも一緒に出発した。母が妊娠していたのでゆっくり旅をした。まず中央高地の水で有名なビッシーやクレルモンフェロウ、ここからは小高い山が続く地域なので雪のために交通止めになっていたりして時間が結構かかった。有名な観光地のカルカッソンに行った。平地の中に台地のような人工的な起伏が見え、だんだん近づくとそれが堅固な城塞だとわかった。この地方を走ってみると小規模のこのような町が随所に見られた。この辺りは非常に寒くて早く海側に出ようと先へ急いだ。60キロくらい走って地中海に面したナルボンヌに着いたら、とても暖かい。スペイン国境に近いペルピニョンの町の近くのバルカレスにいった。ここは父がリゾート開発を手伝ったところだ。ここの新しいホテルに泊まったが、ちょうどクリスマスというのに閑散としている。クリスマスは家族と過ごすというので静かなのだろう。

翌日はスペインのバルセロナに入った。夕立みたいな雨が降って、着ているのが冬服だったせいか異常に蒸し暑くてまるで梅雨時のようだ。夕食は町の人で賑わっている、客を選んだ魚介類を焼いて食べさせてくれる店に入った。ここは両親はすでに来たことがあったので今回は主にガウディの建てた20世紀初期の建築を見た。50年以上も工事中の大聖堂のサクラダファミリアは前に来た時はがらんとした敷地に周囲の壁と尖塔が立って彩色はされていなかったが徐々に細部もできていた。でもまだまだ完成しそうにない。ここではちょっとホテルを探しに行っている間二、三分車から離れた隙に、鍵のかけていない車から、ぼくと父のスキーウェアを盗まれてしまった。この街で必要な物を揃えピレネーのスキー場へ向かった。近くまで来たのだけれど雪がない。トンネルを越えたらやっと雪山にたどりついた。サンマルタンに5日間ほど滞在した。ぼくはスキーは3回目だった。今度はスキーを履いて喜んでいて。母は産科医に「転ばないように」と言われていたので、ぼくは2度くらいしか保育所に預けられなかった。保育所はロープウェイで谷ひとつ越えたところにあった。とっても見晴らしがいいので、保育所に行くのはいやだったけれども、これに乗るのは面白い。バルセロナから3時間かからずに着いてしまうので保育所もスペイン人の子供たちが多い。この時はインストラクターを頼んで新雪の中を3人は楽しんでいた。

この後アルルへ行った。宿はアレーヌ（円形闘技場）から近いローヌ川沿いにある小さいホテルに決めた。前の広場に駐車しておいたところ、翌朝見ると車（シトロエンのドゥシュボー）の屋根の幌を切られてスペイン土産を盗られてしまっていた。警察は調書をと

ったりしただけで時間だけかかってしまった。外から見えるところに置かないようにといつも気をつけていたのに、フランスに戻ってきた気の緩みか油断してしまっていた。ここでは幌を取り寄せて直してもらうため予定より長く滞在してしまった。ローマ時代に一番栄えていた町なので遺跡も多く、またゴッホの通ったカフェとか退屈はしなかったが、バスに乗ったり電車で近郊へと、交通機関を調べて動かなければならないので、朝寝しては行きたいところも行けなかった。

帰りがけにオランジュというやはりローマ時代に栄えた町に1泊した。町の門を入ると劇場の遺跡があり今は多目的に講演会やらオペラにつかわれている。何もしていなかったで舞台上がったり、段々に上っていく客席から後ろのサンチュートロープの丘に登って言った。そこから廃墟が見え、町のつくりがよくわかる。2週間以上も狭い車内に4人で乗っていたので由佳ちゃんはおぼくがあんまりうるさいので途中から飛行機でパリに帰ってしまおうと思ったそうだ。

## V

1977年4月ぼくは4才になっていた。復活祭前後2週間ほどを母の友人のトゥルナイエ、アネットの家に行った。そこはアノネという町でリオンから80キロくらい南の町だ。実家のある地方で設計事務所を開いていた。忙しいので手伝いがほしいと言うことで、父も一緒に車で行った。母は流産しないようにと、アノネの産科医を紹介してもらっていた。最初の2日間は週末だったので20キロほどマッシフサントラル（中央高地）にはいったスキー遊びのできる山小屋で過ごした。翌日月曜からこのエコールに特別入れてもらい、午前中はそこで遊び母が迎えに来て一緒に帰り、ぼくより1歳半上のバンサンと夕方まで遊んだ。次の週末は、アネットが友人達と豚1匹買って、農家でハムとかソーセージとかベーコンとか様々な保存食品を作るというので、一緒に行って農家の家畜やペットと遊んでいた。2週間も居るとここもすっかり春が来て瞬く間に花が咲いて美しい季節になった。汽車でパリのリオン駅に着くと父が駅まで来ていた。

6月7日に弟「乃琶」が生まれた。生まれる時に羊水を飲んでしまったので、家の近くのクリニック・イルドフランスから、14区の新児専門病院に移され1ヵ月近く入院した。「ノワの箱舟のようになってしまった」と後に話していた。母は5日間で帰ってきた。

この間にぼくの学校では春のお遊戯会があり、タンタンや父が見に来た。王様とお姫様の結婚式の劇で、ダンスしたりご馳走を運ぶコックさんの役をしたり、ぼくは花になって風が吹くたびにゆらゆら揺れたり蝶にとまられたりしていた。

母は家で器具をつかって母乳をしぼって病院に届けていた。保育室に入るために、白い帽子、マスク、上着、ズボン、靴カバーを着けた。最初見た時保育器の中で管をつけられ

でずっと眠っていたが、何度か行くうちにやっと母は抱かせてもらえるようになった。

一ヵ月ほどして退院してきたので、ぼくはとっっても抱きたかったがなかなか触らせてくれなかった。無菌室にいたので風邪気味だったりすると、マスクをしてミルクをやっていた。この時のぼくのことをタンタンは「尋ねてくる人が赤ん坊のほうに集ってしまうのでむくれて前のように元気よく駆け寄ってこないね。乃琶を抱いている私の脚を蹴ったりしたのよ。以前だったら男の子らしく抱っこなんて冗談じゃないとばかり動き回っていたのに」そんなことがあった数日後にも乃琶より一週間早く生まれたフランソワーズを連れて知人が来て、赤ちゃんコンクールのように抱っこし合っていたので、子猿のようにマモンにしがみ付いて離れなかった。

バカンス時期になった。両親の友人のジルがコニャック地方の田舎で結婚式を挙げるといので1週間招待してくれた。パリからぼく達のほかに事務所の建築家のミッシェルがその娘サラを連れて出席することになった。

8月14日に出発した。田舎はボルドーから100キロくらい北のジロンド川の河口の町ロワイヨンの近くの田園の中にあった。この辺の領主というような百年以上たつてそんな家で、2階に5寝室あり1階は広間になっていた。ここで披露宴をするという。ここでは誰も暮らしていないということで設備が悪いので、ぼく達にはロワイヨンの街なかのアパートマンを用意してくれていた。翌日が結婚式だった。昼に親類みんなが集まってジロンド川の見渡せるレストランでの会食にぼくたちも招かれた。午後の教会での結婚式には乃琶は人に頼んで出かけた。町の人々がたくさん出席して賑わった。披露宴会場となっている屋敷のほうには夕方から近隣の人々が集まってくる。それぞれお祝いの品としてキッチン用品とかリネン類とか手作りのパイとか、地方色豊かだ。母は2人に日本の浴衣と帯をパリの三越で買ってきて贈った。広い庭や広間で一晩中踊ったり、歌ったり、食べたり朝まで続いた。

翌日からこの地方をジルの案内で見まわった。コニャックを造るところを見たり馬に乗せてもらったり、その間、宴会の時の残りが沢山あるので、食事時には帰ってきて宴会場になったその家で頂いた。5日間ほどこのように過ごしてからミッシェルやジルと別れてゆっくり旅をしながらパリへ戻ることにした。

ロワールに泊まったりしながら帰る途中、あと100キロくらいでパリに着くというところで、ボンネットから煙が噴出してきた。父がすぐにぼくたちを下ろして、遠ざけてからボンネットを開けると、急に空気が入ったからか燃え上がった。すぐにおくるみなどを被せたので消えたが、シトロエンの新車を買って2年も経たないのに、エンジンに回りの管が過熱され、それを包んでいた断熱材からだった。それでも無事にパリに戻った。

9月15日から長いバカンスも終わってまたエコールへ行き始めた。ぼくたちは今年の

末には日本へ帰ろうとしていた。母はそれまでにはディプロムをとろうと準備していた。取得するとフランス政府公認建築家の資格になるのでとても難しい。2年も前から学内や学外の指導教授を決め、半年前から日程を決めずっと準備してきた。卒業審査は一人一人審査日を決め公開で行われる。それで乃琶はクレッシュ（保育園）に入れることにした。ぼくのエコールの道を挟んだ隣にあった。

毎朝、母は乳母車に乗せたり手を引いたりして、クレッシュとエコールへおくっていく。帰りは4時半頃迎えに来る。これから12月まで忙しいときは、コンシェルジュのおばさんが迎えに来たり掃除洗濯アイロンかけに来たりして

「日本人はきれいづきと聞いていたけれど隣と比べて汚いね」

隣の建物の夫婦で盲学校の教師をしている家でもお手伝いをしている

「隣は埃がわからないのでそこをするだけよ」

と比較して言われた。

母の友達が入れ替わり立ち代り誰かが来ていた。やっと母は12月17日に卒業審査に合格した。帰国を24日に決めていたのでぼくたちは1週間でいろんな人とお別れパーティをして、荷物を60個くらい発送して4人とも疲れ果てて日本行きの飛行機に乗り込んだ。